



みちくさ

2017. 1. 19 No. 37

流れのままに

先日同窓会の打ち合わせがありました。6月に同窓会総会を行うべく、役員の方々が大勢集まり熱心な討議をされました。ところで、時々学校には昔の同窓生や学校にかかわりのあった方々が訪ねてこられることがあります。昨年みちくさ13号でご紹介した長崎の方も、創始者岡千仞とゆかりのある方でした。また先日は、9代前の校長先生で、私が前に在籍していたときにお世話になった石森幸子先生が訪ねてこられました。とあるところから、校歌の書を額装したということをお聞きになられ、どんな仕上がりになったのかとご覧に来られたのでした。いつまでも学校を大事に思ってくれる人がたくさんいることは、とてもうれしいことで、母校という思いを、ぜひ子どもたちにももって欲しいなと思います。

さて、昨年末に、本校に昭和8年頃在籍していた西條さんという方からご連絡をもらいました。本校では卒業はされていないのだけれど、当時お世話になった担任の消息が知りたいということで、お電話をいただいたのです。残念ながら、学校は戦後に一度火事で焼けているため、それまでの記録が全く残っていないのです。ただ、当時のアルバムだけがかろうじてあったので、先生のお写真だけ、複写してお送りいたしました。その後、ご丁寧に感謝の言葉を伝えるに学校までいらっしゃいました。校舎をご案内すると、もちろん当時の校舎ではないのですが、青葉山や広瀬川を望むこの地域がとても懐かしいと話していかれました。その際、ご自分で書かれて出版された自伝をいただきました。当時父親にも早く死なれ、3歳下の妹さんも亡くなられるなど、大変苦労をされたようです。西條さんが片平に通っていた頃の記述が自伝の中にありましたので、以下に一部をご紹介します。



夕刻になると、どこからともなく亜炭の燃える臭いがしてきて、これが仙台の夕暮を思わせる一つの郷愁でもあった。また、豆腐屋さんのラッパの音、南蛮売りのパタンパタンという音など、仙台特有の音がなつかしい。夜になって、薄暗い路地から三味線の音が聞こえる処もあり、情緒豊かなムードが心に残っている。当時の東一番丁も記憶に残っている。街の真ん中には仲見世(店)が連なり、夜ともなればガス灯が灯り、ガスの臭いがしていた。衣類や喫煙具などの他、万年筆(灰まみれになったバラもの)、アルコールランプで熱し、ピンセットで引っ張って作るガラスペンなど、その工程を眺めるのが面白く、何時までも見ていた。碁や将棋をするところもあり、大人たちが群がっていたが、争い事が元来嫌いな私は、そんなところは素通りした。

(中略)

昭和7年4月、私は仙台市立片平丁小学校に入学した。木造の古い校舎で、戦後火災で焼けるまで使われていた。広い昇降口で、受け持ちの先生は鈴木茂工衛門というおじいさん先生であった。

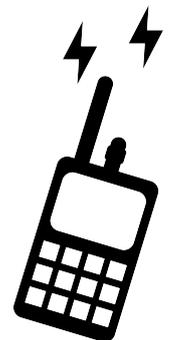
同級生の男の子たちは「はい、おんちゃん、おんちゃん」と手を挙げると、先生は「おんちゃんでないの、先生といいなさい」と発言を制した。また、毎朝昇降口を入ると、白いエプロンをした女の人が、スプーンで一杯の肝油を飲ませるのである。当時、子どもに対する栄養の補給であったのか、その肝油といたら魚臭い嫌な臭いと、胸が悪くなるような味であった。私は子どもの頃から臭いには敏感で、わずかな臭いでも頭痛がしたり胸が悪くなったり、吐いたりした。

この頃はどんな景色が見えていたのでしょうか。セピア色の景色が蘇ってくるようです。きっと今よりも時間がゆっくりと流れていたのかも知れません。町の中でいろんな音が聞こえていたということが興味深いです。今のように車の騒音などもなかっただろうし、賑わいといったら、人の声ぐらいだったのでしょうか。

木造だった校舎の写真は、校長室前にも飾っております。昭和40年代まで使われていた木造校舎ではない、もっと古い校舎でした。

任天堂のトランシーバー

子どもの頃、懸賞に応募すると、面白いように当たる子どもでした。丸出だめ夫の眼鏡とか、おしゃべりするケメ子の人形とか。(昭和40年代に流行ったキャラクターです)任天堂から発売されたトランプの包み紙を送ると、トランシーバーが当たるといふ懸賞がありました。年内消印有効のところ、トランプを購入したのは12月30日でした。(なぜかどうでもいい細かいところまで記憶があります)懸賞に応募したら見事にトランシーバーが当たり、冬休み中に送られてきました。もう信じられないくらい有頂天になりました。が…、4つ下の弟があまりにも興奮しすぎて、一度も使うことなく、玄関のたたきに落としてしまい、見事に壊れてしまいました。ここで終われば幻のトランシーバーということになったのでしょうか。余りにも落胆大きかった兄弟の姿を見た父親が、事情を書いた手紙を添えて、壊れたものを任天堂に送ったのです。そうしたら、(修理代は払っていません)任天堂から再度新品のものが届けられたのです。もう二度目の有頂天でした。今度は落とさないようにしっかりと持って、兄弟二人であちこち出かけていってトランシーバーで遊びました。



任天堂は元々トランプとか玩具を売っていたメーカーでした。玩具と一緒に子どもたちには夢を売っていたのかも知れません。懸賞に当たった直後に、奈落の底に突き落とされた兄弟がかわいそうと思ってくれたのか、今思うと粋な計らいをしてくれたものです。ものない時代、子どものおもちゃはとても貴重でした。今は子ども部屋におもちゃが溢れているのかも知れませんが、いっばい夢を見させてくれるおもちゃがどれくらいあるのでしょうかね。

なお、余談ですが、大人になったらさっぱり懸賞の類いには当たらなくなりました。